

## 私が住む場所

村上市立山北中学校 3年 板垣 風

ここに住み続けたい。私にそう思わせたのは、ある一つの出来事が関係している。それは祖父の死だ。私は以前から大都会の暮らしにあこがれを感じていた。いつか大都会に出て夢を叶えるんだと、いつもそう思っていた。しかし、それは突然起きた。

家でちょうどこの作文を書こうとしていたとき、突然電話が鳴り、「じじの息が止まった。」

と、病院にいた祖母から連絡があった。すぐに病院に駆けつけたが、祖父の心臓はすでに止まり、何度呼んでも返事は返ってこなかった。家に帰ると、予想もしていなかった出来事が起きた。親戚が二十人ほど家に集まってきていたのだ。そして、みんな泣いていた。私は、その状況に驚くと同時に「もしこれが大都会のど真ん中なら、こんなことはありえないのではないか。」と思った。

私の住む地域、「中継」は人口二百八十二人の小さな集落だ。中継では、年に数回イベントや祭りが行われる。そのどれもが、中継の人が運営し、集落みんなが参加できるものだ。春に行われる「中継桜まつり」では、しだれ桜の下で花見をしたり、近くで採れた山菜などを販売したりする。夏に行われる「盆踊り」では、おばあちゃん方が歌う歌に合わせて、高校生を中心にみんなで輪になって踊る。秋に行われる「中継もみじマラソン」では、中継の景色を楽しみながらコースを走り、参加者に豚汁が振る舞われる。冬に行われる「雪ほたる」では、雪だるま作りや大人が作ってくれた遊び場で遊び、つきたての餅をみんなで食べる。こんなふうに、中継では季節ごとにさまざまな行事が行われる。しかし、どれも共通してあることが言える。それは、集落みんなが助け合っているということだ。子どもたちの安全を大人が見守り、大人でも分からないことがあればその上の代の人たちが教え、その人たちを子どもたちが笑顔にする。そうしてこの集落は成り立っている。だから、この集落では、一人一人の存在が大切にされ、必要とされているのだ。そんな集落の姿がそれぞれの行事の良さとして出るからこそ、集落の外からたくさんの人が集まってくるのだろう。

しかし、今、中継では少子高齢化が課題に挙がっている。以前、中継には保育園や小学校、中学校があったが、今では小学生が十三人、中学生は十二人、そして保育園児は二人しかない。このままでは、活気あふれる集落の姿が、この集落の良さが、いずれ消えてしまうかもしれない。大人になったとき、自分の育った集落に帰ってくるできないかもしれない。そんなの嫌だ。

そんな時起こったあの出来事は、私に地域の現状と課題を確認させ、この集落の温かさを感じさせてくれた。では、私はこの集落のために何ができるだろう。まずは、他の地域から人を呼び込み、集落の人口を増やさなければならない。そのために中継の自然や人、食べ物などの魅力を発信することが重要となる。しかし、今までの私は、中継で見る綺麗な景色も、近くで採れたおいしい食べ物も、何もかも当たり前だと思っていた。そう思っている人は私の他にもいるのではないか。そこが問題なのだろう。他から見れば、すごいことでも、自分たちには当たり前のことなのだから、その良さが伝えられないのだ。私た

ちは、自分たちの住む場所の良さを理解しなければならない。理解した上で、自慢していかなければならない。

私はこの集落が大好きだ。だから、この集落がずっと残るように、自分たちの手で守っていきたい。そして、私が住む場所の未来を変えたい。